

広報のと
No. 70
2010.12

能登

「何もない田舎」には
本当に「何もない」ですか？



特集 **上を向いて歩こう**

～『春蘭の里』の挑戦～

12

平成22年



過疎化、高齢化に直面しながらも
集落の存続のために挑戦する地域がある。
「何もない」田舎には、里山の恵みと
受け継がれた生活の知恵があった。
春蘭の里の取り組みから、地域再生
のヒントを探る。

特集 上を向いて歩こう

～『春蘭の里』の挑戦～

限界集落は「限界」なのか

「限界集落」という言葉がある。人口の50%が65歳以上の高齢者になり、集落機能^{※1}の維持が困難になった集落を指す。限界集落であっても、そこに住む人たちが生きがいと誇りを持って生活している集落は限界ではない。限界という危機感が地域再生の第一歩だ。

過疎地域集落の現状

地域社会を構成する基本的な単位「集落」。国土交通省は、人口減少、高齢化が進む過疎地域^{※2}の集落を対象に、その現状を把握するための調査を平成11年と18年に行っている。

その調査報告書では、二度の調査結果を比較し、全国の過疎地域全体で見られる傾向として①人口減少による集落の小規模化②さらなる高齢化③世帯数の増加（世帯分離と一人暮らし高齢者の増加）④市町村合併による本庁までの距離の増加―などをあげている。

をあげている。

18年の調査では、過疎地域（11年調査時の過疎地域を含む）の集落数が6万2273。このうち、65歳以上高齢者の割合が50%以上の集落は、約13割（7878集落）を占めている。集落機能の低下もしくは維持困難と考えている集落は、全体の約15割（8859集落）。高齢者割合50%以上の集落では約4割となっている。

11年から18年までに全国で191の集落が消滅した。18年調査時で、今後10年以内に消滅の可能性のある集落は423集

能登町集落（行政区）別高齢者（65歳以上）割合

	50%以上	50%未満	合計
宇出津地区	5	39	44
三波地区	2	4	6
高倉地区	0	10	10
神野地区	1	4	5
鶴川地区	0	12	12
瑞穂・宮地区	5	11	16
柳田地区	1	13	14
小間生地区	1	4	5
上町地区	0	9	9
岩井戸地区	1	5	6
松波地区	2	27	29
不動寺地区	1	9	10
秋吉地区	0	4	4
白丸地区	1	6	7
小木地区	0	23	23
合計	20	180	200

※平成22年4月1日現在、住民基本台帳データより引用
※特別養護老人ホームは除く

12集落に広がる春蘭の里

落とされる。消滅した集落の約半数が11年の調査時に予測されていなかった集落で、大部分が自然消滅だったという。集落で発生している問題では①耕作放棄地の増大②森林の荒廃③空き家の増加④ごみの不法投棄の増加―などが高い割合となっている。

15地区に200集落（行政区）が存在する能登町。22年4月1日現在の高齢化率は36.9割で、50%以上の集落は20となっ

る（右表参照）。

町内で最も高齢化率の高い地域は瑞穂・宮地区。この地域で14年前、限界集落という危機意識を共有した7人が『春蘭の里実行委員会』を結成した。現在は12の集落に農家民宿が30軒開業し、国内外から年間約3500人が訪れている。

12の集落は『春蘭の里』と呼ばれている。『若者が戻ってくる農村再生』を夢見て地域を見つめ直し、宝物を探し続けた14年間。その取り組みは、里山を生かした地域活性化のモデルとして注目を集めている。

過疎地域等の集落における高齢者（65歳以上）割合別分類

	50%以上		50%未満	無回答	合計
	うち100%				
全国	7,878 (12.7%)	431 (0.7%)	52,104 (83.7%)	2,291 (3.7%)	62,273 (100.0%)

今後の消滅の可能性別集落数

	10年以内に消滅	いずれ消滅	存続	不明	合計
	全国	423 (0.7%)	2,220 (3.6%)	52,384 (84.1%)	7,246 (11.6%)

※国土交通省が過疎地域市町村を対象に行った、平成18年度「国土形成計画策定のための集落の状況に関する現況把握調査」より引用

※1集落機能…水田や山林など地域資源の維持保全、農林水産業などの生産に際しての草刈りや冠婚葬祭などの日常生活における相互扶助機能

※2過疎地域…過疎対策法（時限立法）によって指定される地域。現在の法律は「過疎地域自立促進特別措置法」。22年4月1日現在776の自治体が指定されている。

※犬の放し飼いは石川県の条例で禁止されています。表紙・3頁の写真は撮影のため、飼い主の立ち会いのもと特別にリードを外しています。

共有した危機意識

「10年後、この集落はどうなるんだ。何とかできないか」

平成8年に春蘭の里実行委員会を立ち上げた宮地・鮭尾地区の7人は、その5年ほど前から話し合いを重ねていたという。

メンバーの一人で、春蘭の里の営業担当を自任する多田喜一郎さん(62)。「集落全体で盛り上げるか、7人でやるかという議論があった。全体の合意には時間もエネルギーも必要。やれる者で引っ張って、いいと思っ

てもらえれば入ってくれるだろうという結論に達した」と結成当初を振り返る。

会長になったのは病氣療養のため東京から奥さんの実家がある鮭尾に移住していた中本安昭さん。中本さんは自分の体を元気にしてくれた自然の恵みと水の大切さをメンバーに訴えた。

「昔から地域おこしには『よそ者』『若者』『バカ者』が必要と言われるが、春蘭の里には中本さんという『よそ者』と一途に走る『バカ者』がいた」と多田さんは語る。

「開発されてきた奥能登の山

の中で、生き残ってきた『春蘭』のしぶとさ、粘り強さ、きれいに思いを込めて『春蘭の里』に決めた」

農家民宿という選択

最初は農産物の販売で1億円の売り上げを目指したがうまくいかなかった。

「売るのではなく、田舎にあるものを食べてもらおう」と考へ、一番条件の良かった多田さん宅を改装。民宿『春蘭の宿』が開業した。

多田さんが目指した民宿の特

徴は、▽一日一客▽輪島塗の膳▽手作りのほし▽地元産の食材▽化学調味料を使わない―など。お金をかけるのではなく、こだわりを持つことで付加価値をつけようと考えた。

「民宿の原点は『さんなみ』さんと富山県利賀村。ほかにも全国を見て回り、良い所は徹底的に取り込むようにしている」

現在は瑞穂地区を含めた12集落に30軒の農家民宿が開業。200人を受け入れる体制が整っている。

「民宿の売り上げを月40万円にしようという目標を掲げている。40万円あれば都会に出た子どもたちが戻ってこれる。今年教育旅行や修学旅行で訪れた学校は町内から中国まで11校。目標の40万円を超える民宿も出てきてメンバーの意識も変わってきたようだ。年間20校を受け入れ、個人客も増えてくれれば十分やっていける」と手応えを感じている。

教育旅行など団体の場合の料金は8500円で統一している。農家民宿としては安くはない金額だ。「価格を下げて心がこもらなくなったら意味がない。

自分を育ててくれた地域に恩返しをしたい。

『若者が帰ってくる農村の再生』という夢を描き、集落の存続のために立ち上がった春蘭の里。

実行委員会事務局の多田喜一郎さんは、強力なリーダーシップでメンバーを引っ張っている。その原点は、自分を育ててくれた地域への愛情だ。

春蘭の里14年の軌跡

平成8年 春蘭の里実行委員会結成(7人)

農産物の商品開発
春蘭の育成
商標登録の取得

イメージソング作成
米穀販売業店「春蘭の里」開始
清酒「春蘭の里」

平成9年 民宿「春蘭の宿」開業

他地域との産物販売開始(山菜・林産物)
春蘭の里ロτζジ完成
春蘭の里構想に賛同した5人が17畝の土地購入

平成14年

菓子製造業取得
農産物加工業の許可取得
第2ロτζジ完成

平成15年

石川グリーンツーリズム促進特区認定
農家民宿4軒、市民農園3戸開業
グリーンツーリズム奥能登全国大会受け入れ

平成16年

水車小屋完成

春蘭の里実行委員会事務局
農家民宿「春蘭の宿」主人

多田喜一郎さん

ただ・きいちろう（宮地）



子どもたちに春蘭の里での思い出をお土産として持ち帰ってもらう。そのための8500円なんだとメンバーに話している。

原点は地域への愛情

「最初から行政の補助を頼った地域づくりは伸びない」と多田さんは考えている。「春蘭の里は行政に頼らないところから始めたのでこれまで続けられた。行政は本気度を見ている。そして本気で取り組むことで行政との接点はできてくる」との言葉どおり、春蘭の里の活動に付帯した、国や県の関連事業が数多く入っているという。

14年間、春蘭の里を引っ張ってきた多田さんには一つの思いがある。

「若くして父親を亡くした自分を地域が育ててくれた。大きくなったら地域に恩返しをしたいとずっと思っていた」

多田さんの地域への愛情と行動力で地域がまとまった。たくさん仲間、協力者も集まっている。14年前、7人がゼロから描いた『農村再生』という夢に、今、一歩一歩近づいている。

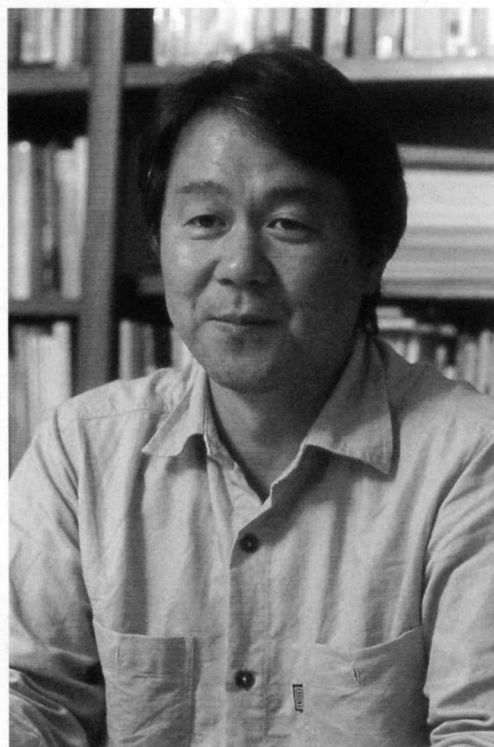
平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	その他
閉校した宮地小学校が宮地交流宿泊所「こぶし」として完成 親水公園（宮地川）完成 炭焼き窯完成 剛まちむら機構の農村漁村農家民宿に係る取り組み事例十選に選定	伝統芸能「みのむし祭り」の復活 半島地域づくりフォーラム3能登農家民宿10軒開業	農林漁家民宿おかせん百選に選定	中目農業賞受賞 農家民宿15軒開業（合計30軒）	エンテバーファン ド21助成（平成8・9・18年）

「何もない田舎」の魅力を引き出す『地元学』

地域の魅力を再発見する手法の一つ「地元学」を提唱・推進する竹田純一さん。本年度から林野庁の森林総合利用推進事業で春蘭の里に入り、里山林をどのように生かすかという調査を進めている。今回、調査のために来町した竹田さんに春蘭の里、そして地元学について聞いた。

【PROFILE】たけだ・じゅんいち

1960年生まれ、中央大学法学部卒後、金融機関、英国技術開発シンクタンク、市民団体を経て、里地ネットワーク事務局長、山村再生支援センター事務局長。また、内閣官房地域活性化伝道師、環境省こどもホタルンジャー審査委員、田園自然再生活動コンクール審査委員、石川県生物多様性戦略検討委員を兼務。東京農業大学学術研究員。



NPO 法人 共存の森ネットワーク理事

竹田 純一さん

― 地元学とは。

地元学の目的は、地元の「今の姿」を把握し、記録することです。しかし、今の暮らしはどのような暮らしなのか、生活文化の厚み（お金で買えない技や知恵）はどのようなかということとは、そこに暮らしている人だけでは分からない部分もあります。

そこで、わたしたちのような外部の人間の目を入れて、地元の人と一緒に地域を再評価するのです。例えば▽囲炉裏のある暮らし▽自分の家に水源を持っていること▽まきでお風呂をたくこと―などの自給する暮らしは、都会にはほとんどありません。地元では当たり前のことで、も都会の人は知らないのという質問します。その一つ一つが資源であるということに地元の人が気づくのです。

若い人がいない。帰って来ない。高齢者が病氣などになって家を閉じていく。全国的に多くの集落が限界に向かっていきます。逆に言うと、地域の活性化とは若い人が来ること。帰ってくるということです。

そのきっかけとして地元学をやって、いろいろな人と一緒に

地域を見つめることも一つの方法だと思えます。集落を開き、外の人を受け入れることができるかどうかだと思います。

― 春蘭の里での事業展開は。

わたしが事務局を担当している林野庁の森林総合利用推進事業の全国公募の中に春蘭の里がありました。後継者の回帰と集落存続のために、里山の幸を生かした農家民宿とツーリズムに取り組む春蘭の里は、全国的にも重要で注目すべき地域として選定されました。

具体的には「恵み多い里山林づくり」を目指し▽どういう管理をしたらキノコや山菜が出てくるか▽食材や産品をどのように生かすか▽里山林を支える里の暮らしを評価し環境を整える方法―を検討していきます。

9月から、32軒のキノコ山に条件の異なる10の実験地を設け、二日に一回キノコの発生状況調査を行っています。

キノコや山菜が一覧としてデータ化されれば、農家民宿の食の提供に生かすことができます。春蘭の里のコンセプトは、地元の素材にこだわっていることです。里山林からの恵みが一

年を通してあれば、これをさらに徹底することができます。

さらに、各農家民宿を中心に暮らしを調査して地域資源を掘り起こします。この地域の生活文化を学びながらまるごと体験できるプログラムが、どこでどのようにできるのかをマップに落とし一目で分かるようになります。

また、里地の維持管理のための保全活動をツーリズムと結びつけて保全型プログラムを作ることも一つのアイデアです。高校生や企業の社会貢献活動（CSR）を呼び込み、地域課題を外部との交流によって解決する試みです。

里山林と里地が手入れされた姿は、都会の人たちにとっても魅力的です。忙しい都会生活での疲れを癒すため、心安らぐ時間を過ごしに来るでしょう。能登の農家のたたずまいは強みです。豊かな環境を意識した情報発信や集客ができます。

春蘭の里は、これまででもすばらしい取り組みを続けてきました。それに磨きをかけることで、この地域をさらに輝かせたいと考えています。

『農家民宿』という選択

囲炉裏の炭火で焼かれる
ヤマメとホンモロコ

能登の農家の姿を ありのままに見せたい。

春蘭の里に農家民宿が誕生してから13年が経過した。現在は30軒まで増加し、団体旅行の受け入れ体制も整っている。「一日一客」。地元の食材にこだわる農家民宿は、古里を求める都会人の受け皿を目指す。農家民宿の魅力、苦勞、そして課題を「満作の宿」主人、松井三代治さんに聞いた。



囲炉裏を囲むぜいたく

「一番楽しいことは、いろいろな人と話ができること。一番大変なことも人との会話」と話す松井三代治さん(64)。

春蘭の里が石川県のグリーンツーリズム推進特区に認定された平成15年、農家民宿『満作の宿』を開業した。この時開業したのは松井さんを含め4軒。「来訪者が増えると1軒だけでは対応できない。できるところだけでもやろう」と仲間同士で話し合ったという。

最初は宿泊だけの許可。16年から飲食業許可を受け、食事の提供ができるようになった。「素泊まりだけではほとんど人が来なかった。どうせやるなら料理を出してもてなしをしたい。ダメでもともと。とにかくやってみようという気持ちだった」と当時を振り返る。

食事の提供でお客さんも入るようになった。もともと人と話をするのが好きな松井さん。食材について聞かれたり、農作業のことを話したりと囲炉裏を囲んだ会話も充実していった。



地元産と季節の旬にこだわる約15種類の田舎料理が、輪島塗の御膳に並ぶ満作の宿の料理

手間暇かけた田舎料理

春蘭の里で提供される料理のコンセプトは▽キノコ、野菜など地元産の食材にこだわる▽輪島塗の膳▽手作りのほしーなど。季節や宿によって食材は変わっても、内容はほぼ統一している。満作の宿でも同様だ。「特別なことはできないし無理もしない。お母さんが今まで作ってきた田舎の料理をそのまま出している」ということだ。

春、夏は山菜。秋はキノコ。冬は塩漬けた保存食が食材の主となる。それにヤマメ、ゴリ、ホンモロコなどの川魚を主人が囲炉裏で焼く。「都会の人が食べたことのない食材も多い。一

2
9
516
223
930



春蘭の里実行委員会副会長
農家民宿『満作の宿』主人
松井 三代治さん
まつい・みよじ（鮭尾）



般の大人なら99割残さず食べてくれる」という。

「先日調査に来た竹田先生には数も量も多すぎると指摘された。もう少し食べたいくらいがちょうどいいと言われたが、その加減は難しい」と苦笑いする。食材からすべて、手間暇かけて作られていることが伝わる料理。そこには農家民宿ならではのもてなしがある。

体験で何を伝えるか

農山漁村で自然、文化、交流を楽しむグリーンツーリズム。春蘭の里でも、農家民宿それぞれが季節ごとに特徴ある体験を用意している。

満作の宿では、松井さんが得意とする米作りや炭焼き、山仕事の体験などを希望する人に提供している。

「体験で一番大切なことは安全管理」と松井さんは言い切る。「安全管理にこだわり過ぎると何もできないという人もいるが、何かあってからでは遅い。常に安全第一を考えている」。

体験を始めたころは、ただ作業してもらえばいいと考えてい

たが、その考えは改めたという。

「例えば農作業の体験では、苗を手で植える意味。はだして田んぼに入るのはなぜか。作業の前や後にはどんな工程があるかなどをしつかり説明して、米の大切さを分かってもらうことに意味がある。体験を通じてそういったことが伝わるようなプログラム作りが重要だと分かった。今ある体験メニューをもっと中身のあるものにして、能登の農家のありのままの姿を見せたい」

農家民宿が増えたことで団体の受け入れは進んでいる。今年是中国からの教育旅行7回を含む11校が入ってきた。しかし、その期間は夏に集中。安定した収益のためには、一年を通していかに個人客を呼び込むかが課題だ。

「事務局に入ってくるお客さんを待つだけではなく、自分たちで『リピーター』として来てもらう努力が必要。自分が元気づけようちに、次の代に引き継げるような基礎を作りたい」

夫婦二人三脚で7年目を迎えた『満作の宿』。松井さんの新たな挑戦が始まっている。

ホンモロコを能登町と 春蘭の里の特産品に――

農家民宿の食事で提供されるホンモロコという淡水魚。

『三平』の主人、山崎増雄さんは、「能登町健康魚・あすなろモロコ生産組合」の一員としてホンモロコの養殖にも取り組んでいる。

ホンモロコは、もともと琵琶湖の固有種で、関西地方で食されていた。

近年、外来魚の増加により琵琶湖のホンモロコが激減。水産資源の確保のため、各地で養殖が行われるようになった。

「きれいな水さえあれば養殖ができる。春蘭の里のお土産や能登町の新しい特産品にしたい」と話す山崎増雄さん（62）は、柳田地区の有志らが平成18年に設立した『能登町健康魚・あすなろモロコ生産組合』に翌年から参加。民宿前の田んぼを利用してホンモロコの生産に乗り出した。21年にはエンデバーファンド21の助成を受け、民宿前の倉庫を改造した加工施設も整備された。

「つくいだ煮のような、保存ができて味も良く、付加価値の高い加工品を作る。試作品の評判は良かった」と語るが、課題もあるという。「当初は県の内水面試験場から稚魚を提供してもらい生産量も多かったが、採算を考えると自分たちで

ふ化させなければならぬ。これが予想以上に難しく安定した生産につながらない状況。朝起きて酸欠で大量に死んでい たときは涙が出そうだった」と振り返る。

春蘭の里などの需要に応えながら、加工品にまわせるだけの生産量を確保するための試行錯誤が続いている。

農家民宿『三平』の開業は『満作の宿』と同じく平成15年。特区認定のときに宿泊業の許可を受けた。

「もともと田舎の家は三世代同居が前提で、冠婚葬祭もできるような大きい。将来、夫婦二人だけでは大き過ぎるし、この家を地域おこしに活用できるならやってみよう」と開業を決めた。

「集落に観光バスが2台来たとき『やって良かった』と感動した。こんなへき地に観光バスが来るなんて夢のような話。それが農家民宿で現実となった」

自営業、農家民宿、ホンモロコ。山崎さんの多忙な日々は続く。

【ホンモロコ】コイ科コイ目バルブス亜科タモロコ属の淡水魚。寿命は2-3年で体長は12-30センチまで成長する。日本産コイ科の魚類の中で最も美味とされる。



農家民宿三平 主人
山崎 増雄さん
やまざき・ますお（本木）

『地域再生』の鼓動



親水公園でヤマメのつかみ取りを
体験する流山市（千葉県）の児童



NPO 法人コブシ理事長

蔭田 信雄さん

かげた・のぶお（柏木）

閉校した校舎を 地域再生のシンボルに――

平成18年、宮地小学校の校舎が宮地交流宿泊所『こぶし』として生まれ変わった。春蘭の里が展開するグリーンツーリズムの拠点として、地域再生のシンボルとして、『こぶし』は大きな役割を果たしている。

ツーリズムの拠点が完成

「どうすれば校舎を残すことができるか」

平成14年3月に閉校した宮地小学校。その校下4集落の代表は、16年ごろから校舎の利活用について協議を始めていた。

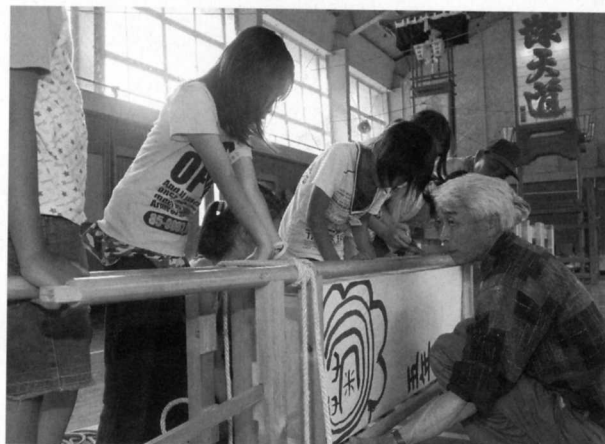
当初、高齢者向けの介護施設が検討されていたが、予算や採算を理由に断念。建物所有者である町と協議を重ねた結果、簡易宿泊施設として整備することが決まった。

農林水産省の補助事業採択にあたっては、春蘭の里が展開す

るグリーンツーリズムの存在が大きかったという。

4集落は、施設を管理するためにNPO法人コブシを設立。安定した維持管理費用を確保するため全10部屋を「オーナー制」で運用することに決めた。

「オーナーには月々の料金を払ってもらい、部屋を管理してもらいます。宿泊が入ればマージンとして戻る仕組みです」と話すのはNPO法人コブシの蔭田信雄理事長（73）。蔭田さんは20年に、初代理事長の篠原正



『こぶし』の体育館でキリコの組み立てを体験する菊川小学校（金沢市）の児童。指導するのは、堂坂了副理事長。

信さんから受け継いだ。「校舎がよみがえったのは地域がまとも、思いが一つになったから。皆さんをまとめた篠原さんの功績は大きい」と振り返る。

古里に帰る場所ができた

春蘭の里との相乗効果もあ

9月19日、20年ぶりにキリコの灯りが集落を照らした。この祭りがきっかけで、宮地地区の若者が春蘭の里実行委員会に加わることに。集落にとっても、実行委員会にとっても大きな一歩となった。



り『こぶし』の利用者は年々増加している。昨年の利用者は約2000人。本年度はさらに増える見込みだという。

「こんな何もない田舎に観光バスが3台も並びます。その様子を見て地域の人たちも喜んでくれるようです」と蔭田さんは目を細める。

『こぶし』は、春蘭の里を訪れる人との交流だけではなく、地元の人や地元出身の人たちの交流の場にもなっている。

「今年は卒業生が3回、同窓会に使ってくれました。大阪から2、3カ月に一度宿泊に来て、ボランティアで花を植えたり草刈りをしてくれる卒業生もいます。古里に家がなくなった卒業生にとっては、帰る場所ができたと感じる人もいるのではないのでしょうか」

交流の場であり、憩いの場でもある『こぶし』。人が集う地域再生のシンボルとして、春蘭の里構想の一翼を担っている。

このうちの1本が、9月19日の祭礼で御輿と共に集落を回った。宮地地区にとっては20年ぶりのキリコ祭り。キリコを担いだのは、春蘭の里にインターンシップ（就業体験）で訪れているホスピタリティーツーリズム専門学校（東京都）の生徒だった。お世話になった地域に恩返しをしたいと祭りの日に14人が来町したという。

『こぶし』の体育館には、宮地地区の祭礼で使用されていたキリコや体験用のキリコなど6本が並んでいる。

20年ぶりのキリコ祭り

「キリコが立ち寄った家では、喜んで酒を振る舞って盛り上がっていました。数少ない地元の若い人も外に出てきて、うれしそうにキリコを担いでいたのが印象的でした」と振り返る蔭田さん。

『こぶし』でのキリコ担ぎ体験が祭りの復活につながりました。反対もあるかもしれませんが、一生懸命やることで良いことが見えてくるんです」と決意を新たにしている。

キリコ祭りの復活を見て、集落の再生を感じました。



春蘭の里実行委員会顧問

瀬川 徳子さん

せがわ・のりこ（金沢市）

わたしが春蘭の里に初めて訪れたのは8年前。皆さんに迎えてもらっていろいろ話を伺いました。このとき「何もない所がいい所なんだよなあ」という言葉に『地域の人たちがその良さに気づいている』と感動し、そのまま仲間に加えてもらいました。顧問という肩書きですが、地域が持続しながら活性化する姿を勉強させてもらっています。

春蘭の里は、千葉県で育ったわたしにとって古里になりました。今では、お姉ちゃんと会いたいという息子と一緒に春蘭の里に里帰りしています。こ

こで学んだこと、受けた感動を今後の仕事に生かすことが、皆さんへの恩返しだと思っています。

キリコの復活にも立ち会いました。笛の音、鐘の音を聞いた集落の人が笑顔で出てきていました。キリコは小さかったけれど、集落にとってすごく大きな一歩を踏み出したような感動に包まれました。

地域のやる気が専門家などいろいろな人を引きつけています。新しい農村のスタイルを作りだそうという春蘭の里の挑戦は、次の一歩に向けて走り出したのではないのでしょうか。

お世話になった 皆さんの力に なりたい。

春蘭の里は、観光分野を学ぶ専門学校のインターンシップ（就業体験）を受け入れ、交流を深めている。将来、旅行業界で働く人材とのつながりは大きな力。その中から、能登で働きたいという若者が生まれた。



春蘭の里実行委員会事務局

汪 銘皓さん

ワン・ミンハウ（台湾出身）

「海」

のイメージがあった能登半島。初めて春蘭の里に来た

ときは、携帯電話も通じない山の中でびっくりしました」と話すワン・ミンハウさん（28）。観光業界で働く人材を育てる東京のホスピタリティツーリズム専門学校の留学生として、平成20年の夏休み1カ月を春蘭の里で過ごした。

19年からインターンシップを受け入れている春蘭の里。学生らは『こぶし』で共同生活を行いなから、春蘭の里の一員として活動する。

「地域の皆さんが本当に温かく迎えてくれて、日本語や日本の文化を学ぶことができました。研修仲間とも強いきずなができ、とても楽しかったですね」と研修期間を振り返る。

ワンさんは、翌年の研修も春蘭の里を希望。周りの学生も誘ったという。「春蘭の里の一番の良さは『人』です。ここに来てもらい、滞在してもらえば必ず分かってもらえます」。

『こぶし』を利用することで学生らの経済的負担は少ない。さらに学校側からも『春蘭の里

から帰ってきた学生の表情が見違える』と言われるほどの好評だという。次代の観光業を担う若者との交流や学生らのアイデアを聞くことができるなど、受け入れる春蘭の里にもメリットが多い。

研修を受けた学生らは、団体客を受け入れているときに手伝いに来たり、宮地の祭りでキリコを担ぐなど、研修以外でも訪れるようになっていく。春蘭の里のメンバーも、学園祭に参加するため東京に行ったりとお互いの交流を深めている。

都会にいない必要はない

就職を控えたワンさんは、能登で働くことを希望した。

「インターネットがあれば、情報や品物はどこでも手に入るので都会にいない必要はありません。それよりも自分がついて行きたいと思う人のいるところで働きたいと思いました」

卒業間際に事務員に空きができ、多田さんから春蘭の里で働かないかと誘われた。

「皆さんの力になりたいと思って働いています」

現在は、春蘭の里実行委員会事務局として、宿泊の受け入れや会員間の連絡、顧客とのメールのやりとりなどの仕事をこなしている。

「春蘭の里で研修をして観光業に就職した仲間たちがいます。彼らはまだ新人ですが、これからその効果が出てくるでしょう。ホスピタリティツーリズム専門学校の卒業生として、春蘭の里の一員として、この関係がこれからも続いてほしいと思っています」

台湾と東京で観光業を学んだワンさん。その知識と経験は、春蘭の里のこれからを支える。

ホスピタリティ ツーリズム専門学校

観光・サービス業団体から推薦・支援される専門学校。旅行科やホテル科など7科を設置し、留学生制度も備える。これまでに約32,000人が卒業し、各業界で活躍する人材を輩出している。

【PROFILE】 ワン・ミンハウ

1982年台湾生まれ。国立のホスピタリティカレッジを卒業し、1年間の兵役を経て、日本に留学。台湾と日本の添乗員資格を持つ。2010年4月から春蘭の里実行委員会事務局に就職。

『里山イニシアティブ』

「里山では、人が手を加えることで生態系を維持することができる」。10月に名古屋で開催された生物多様性の国際会議で、日本政府は自然との共生モデルとして「里山イニシアティブ」を提唱。「SATOYAMA」が世界へアピールされた。里山を保全し、その恵みを生かす春蘭の里の活動は「里山イニシアティブ」そのものではないだろうか。

春蘭の里が整備する
キノコ山の一角

春蘭の咲く里山を

「里山はほったらかしでも、人の手が入りすぎてもダメ。適度に手入れされることがキノコにとって良い環境なのです」

中本安昭さん(73)は、春蘭の里の取り組みの一つである里山保全の中心人物だ。「子どもころから一人で山に入ってキノコを探っていました」と話す中本さん。中学校までは岐阜県奥飛騨地方で過ごした。35年前、病氣療養のために奥さんの古里である鮭尾に。そのままここで暮らすことを決めた。「こっちに来てから病院に行つてません。水と空気が良いからでしょうか」とほほ笑む。

春蘭の里実行委員会の最年長で会長を務める。「春蘭の里」のネーミングは中本さんの案だという。「良い環境の里山には春蘭が自生します。春蘭は里山のバロメーターなのです」。

本格的キノコ調査を開始

キノコや山菜も地域の大切な資源の一つとして考え、里山の

保全活動を続けてきた春蘭の

里。本年度から林野庁の事業を受けて、キノコ博士・赤石大輔氏(NPO法人能登半島おらっちやの里山里海研究員)のもと調査研究が実施されている。

「20区四方の10区画を選んで整備をし、二日に一回のペースで記録係と一緒に調査していきます。調査では、いつ、どこで、どのようなキノコが出るかをGPS機能付きのカメラで撮影し、データとして残す作業をしています。調査区域では約100種類のキノコがあり、食用は約1割というところです」

本格的なキノコ調査を行っている場所は多くない。調査を継続してキノコの写真とデータがそろえば、体験でのアピールや農家民宿での計画的な提供など活用の幅は大きく広がる。

「毒キノコも必ず記録しています。キノコ料理を提供する民宿にとって、一番重要なことはキノコ中毒を出さないこと。猛毒もあれば一部の人にだけ毒になるものがあります。わたしも民宿ももっと勉強して、キノコ狩り体験をする人に教えられるようにならなければいけません」

持続可能な里山に

中本さんは、里山管理の新しい形を作りたいと考えている。

「キノコを見つけると小さいものまで採ってしまう人が多いのは、ほかの人に採られたくないと思うからです。みんなで恵みを共有すれば、これはまだ採れないとか、残そうということができます。これが持続可能な里山の管理なのです。里山にはキノコや山菜以外にも食べられるものがたくさんあります。計画的に植樹をして四季の変化を楽しめる森にすれば森林療法も可能でしょう。やりたいこと、可能性はたくさんあります」

子どもころから里山と共に生きてきた中本さん。里山への強い思いと豊富な知識は、春蘭の里の大きな力となっている。

春蘭が自生する 持続可能な 里山を目指す。

里山の恵みといえばキノコと山菜。春蘭の里は現在、32畝の里山をキノコ山として整備している。本年度からは林野庁の事業でキノコの本格的な調査も始まった。実行委員会会長でキノコ山調査を任される中本安昭さんに、春蘭の里が目指す里山の姿を聞いた。



キノコ (11月12日撮影)



先駆的里山保全地区・里山里海ミュージアム

県内先進地としての支援

石川県では、住民が意欲的に里山の保全活動をしている地域を応援しようと「先駆的里山保全地区」として春蘭の里を含めた7カ所を選定しました。

本年度は、里山を一つの博物館として見立て、暮らしや生業、歴史・文化などの地域資源を発信する「里山里海ミュージアムプロジェクト」を珠洲市北部地区と春蘭の里で実施しています。

生物多様性の向上のためには、里山の保全が非常に重要ですが、一方で過疎化や高齢化の問題があります。ミュージアムでは、地域の人々が「里山学芸員」として里山の魅力を紹介し、訪れた人が一緒に

保全活動に参加する仕組みづくりを検討します。

農家民宿やツーリズムで里山を利用保全することが、交流人口の増加や新しい産業の創出など地域の活性化につながればと思っています。

県では、里山を利用しながら保全する「利用保全」をキーワードにしています。春蘭の里のキノコ山の整備が、まさに里山の利用保全です。

キノコ山を整備することで食材として使えるキノコや山菜が増える。そして里山は生物多様性の豊かだった昔の姿を取り戻すのです。

県としては、ほかの地域が取り入れられるような成功事例・モデル地域を作りたいと考えています。春蘭の里は、里山保全活動やグリーン・ツーリズムの県内先進地です。今後もさまざまな角度から春蘭の里を応援していきたいと思っています。



石川県自然保護課
とがのりまさ
梅 典雅さん



春蘭の里実行委員会会長

中本 安昭さん

なかもと・やすあき（鮭尾）

あいさいちば
【のと愛菜市場】写真下

宮地・鮭尾・太田原・柏木の住民 20 数人が共同で運営する農産物直売所。5月から11月までの土・日・祝日、午前9時から午後6時まで営業。

倉庫を改造した店内には、会員らが育てた米や野菜のほか、里山の恵みである山菜・キノコ・ジネンジョ、のと夢づくりで加工した梅干しや漬け物など、この地域で生産されたものを低価格で販売している。



里山の恵みを 高齢者の 生きがいに



【のと夢づくり】写真上

平成17年、地元の要望を受けて町が建設した農産物加工施設を、農事組合法人のと夢づくりが指定管理者として管理・運営する。主な加工品は山菜や野菜の漬け物、梅干し、赤飯、みそなど。

週に一度、施設に集まって漬け込んである野菜を真空パックに詰めて商品化している。のと愛菜市場や「なごみ」、JAおぞらの青空市場（穴水町）などに出荷。

「とにかく10年頑張ろう」と声を掛け合って続けてきて、10年が立ちました。メンバーのほとんどは70歳以上、80歳代の人でもあります。高齢化は深刻ですが、それぞれ生きがいを持って自分の得意分野で頑張っています。地域の高齢者が元気に暮らすことができるのは、里山の恵みがあるからだと思っています。

「とにかく10年頑張ろう」と声を掛け合って続けてきて、10年が立ちました。メンバーのほとんどは70歳以上、80歳代の人でもあります。高齢化は深刻ですが、それぞれ生きがいを持って自分の得意分野で頑張っています。地域の高齢者が元気に暮らすことができるのは、里山の恵みがあるからだと思っています。

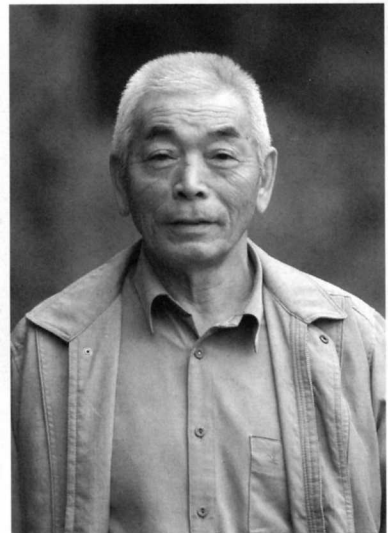
の

と愛菜市場は平成13年、能登空港開港前に何か地域おこしができないかと地元有志26人が始めました。

「楽しみながらボケ防止につながるが一番だ」といつも会員に話しています。

今までは、作りすぎた野菜や採りすぎた山菜・キノコなどは人にあげるか捨てるだけでしたが、直売所があれば少ないながらもお金になります。出荷する高齢者にとって、野菜作りやキノコ採りは、生きがいになっていくのではないのでしょうか。

直売所ではおはぎやかきもち、漬け物なども販売したいと考えましたが、加工場と各種の許可が必要でした。町政懇談会で町にお願したところ、加工場を整備してもらうことになり「のと夢づくり」を設立しました。



のと愛菜市場 会長
農事組合法人のと夢づくり 理事

藤田 三喜男さん

ふじた・みきお（柏木）



キノコ山を散策する視察団

生物多様性と里山

生物多様性条約の締約国が2年ごとに集まり国際的な枠組みを決める会議が10月11日から約3週間、名古屋で開催された。

世界179カ国から約1万3000人が参加したCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）。そのエクスカージョン（視察）が石川県でも実施され、10月23日から二日間、18カ国52人の視察団が石川県内の生物多様性に対する取り組みを視察した。

COP10（生物多様性条約第10回締約国会議） エクスカージョン in 春蘭の里

今回の視察では、生物多様性の観点からも世界が注目する「SATOYAMA」の代表として、春蘭の里が紹介された。

温かいてもなしに高い評価

春蘭の里では、長龍寺でセミナーを行ったあと昼食。午後からはキノコ山の視察とこぶしの見学が行われた。同行した石川県自然保護課の梶典雅とかのりまささんは、キノコ山の視察について「日本は世界的に見てもキノコの種類が多いが、これは木の種類も多いということ。キノコは生物多様性においても重要な役割を



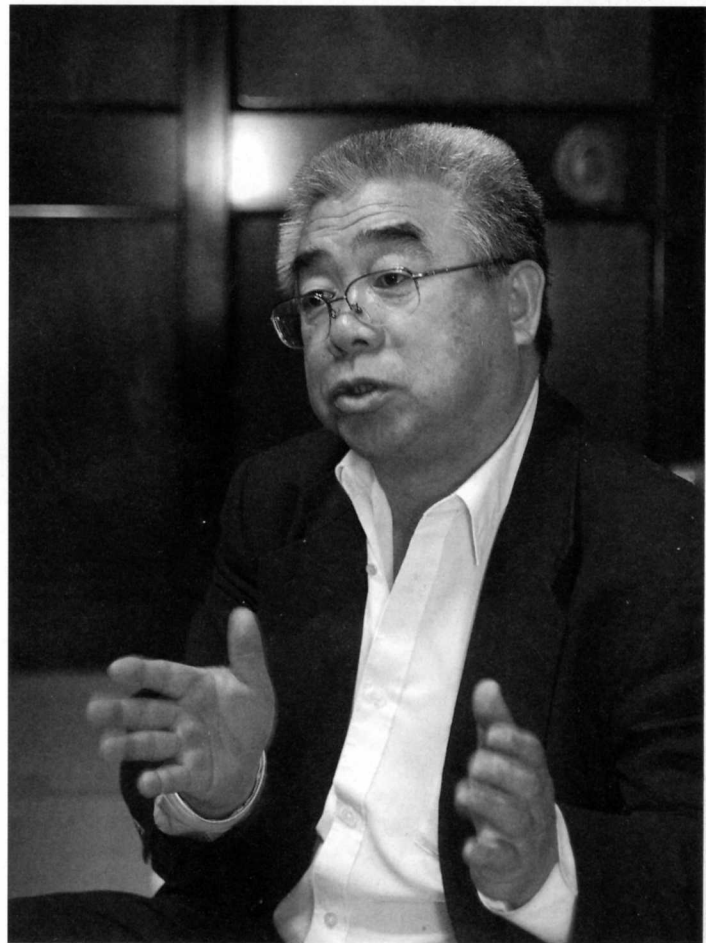
清龍坊での昼食を準備する地域の皆さん。春蘭の里で収穫された山菜やキノコ料理を輪島塗の器に盛りつける。漬け物、酢の物、煮物、天ぷらなど8品を用意。地元の食材を使った料理の評価も高かったという。

ノコは生物多様性においても重要な役割を持つている」と話す。参加者は、春蘭の里のメンバーに質問しながら秋の里山を散策し、自然と共生する日本の農村の姿に感心しているようだった。

視察終了後に県が行ったアンケートでは、47人中34人が一番良かった視察先として春蘭の里をあげた。「素朴だが心のこもったもてなし（ホスピタリティ）」への評価が高く、梶さんは「結果は良かった。世界の人に春蘭の里を知ってもらった意義は決して小さくない」と成功裏に終わった視察を振り返った。

春蘭の里の夢、 そして新たな挑戦

自分たちがやってみせるはずで 地域全体をプラス思考に――。



春 蘭の里は、限界集落では
ありません。なぜなら、
この地域には元気な高齢者が多
いから。元気な高齢者が春蘭の
里の地域資源なのです。

昔からの生活文化を知ってい
る。地域の伝説や伝承を語るこ
とができる。野菜作りの名人。
キノコ採りの名人。能登の田舎
で培われた高齢者の知恵こそ
が、どこにもないこの地域だけ
の財産だと思っています。
都会の人が驚く能登の観光資
源は、黒い屋根瓦と白い壁の家
がある景観です。この価値を分

かつてる人は多くありません
が、失われてしまう前に能登半
島全体で対策を講じるべきだと
思っています。

田 舎がこれから生き残って
いくためには、都会と田

舎をマッチングさせるしかあり
ません。都会の人を農家民宿で
呼び込むことが、能登の一次産
業の発展につながるし、一番の
近道だと思っています。

農家民宿はこの地域の本物を
提供することにこだわっていま
す。COP10の視察でも高い評

価を得られたことで、新しく
入ったメンバーも自信を持ち始
めました。

これまでの成果を見ても、農
家民宿という選択は間違いでは
なかったと確信しています。

あとは、息子たちが帰ってこ
れるように月40万円の売り上げ
を確保することです。都会の人
で民宿をやりたい人でもかまひ
ません。この地域に若者が戻っ
てくる基礎を作ることが、集落
の存続につながるのです。

現在30軒の農家民宿が、ほか
の地域にも広がってほしいと考

えています。当日や中斉、神野
地区などは宮地から車で10分ほ
どで、立派な家がたくさんあり
ます。この地域であと10軒から
15軒くらい増やせれば面白くな
るのではないのでしょうか。

さらにグリーンツーリズムの
海版も可能です。それには恋路
の民宿群が一番適していると思
いますし、能登町のグリーン
ツーリズム協議会で話をしてい
こうと思っています。

地 域全体をまとめるには、
まず自分たちがやってみ

せて結果を残すことが重要で
す。成功事例を示すことで、今
度はこれをやれば面白いじゃ
ないか。次はあれをやれば楽し
いんじゃないかと地域全体がプ
ラス思考になります。ほかの地
域のモデルとして、一つの方向
性を示すこともできます。みん
なが楽しみながら地域おこしに
参加するようになるのです。

マイナス意見や批判もありま
すが、わたしたちは言葉でつぶ
されたくはありません。農村再
生を信じて、前向きに、プラス
思考で進んでいきます。

のと愛菜市場でお客さんを迎える
山本さかのさん(柏木・写真左)と
堂谷節子さん(宮地)。



【取材を終えて】

春蘭の里の皆さんは輝いて見える。まだまだメンバーのボランティア精神に支えられている部分もあるが、やっている本人たちが楽しんでいいるから、自然と笑顔が出るのだ。

能登半島のどこにでもあるような中山間地の集落。決して特別な場所ではない。よそ者を受け入れること、地域を引っ張るリーダーの存在が春蘭の里を地域づくりの先進地にまで成長させた。

仕事がない。遊ぶ場所がない。能登で『ない』ことを探すのは簡単だ。でも本当に『何も無い』のだろうか。都会に『無い』ものが、実はたくさん『ある』のではないだろうか。

マイナス思考ではなくプラス思考の頭で、ちょっとだけ視点を変えて自分たちの地域を見てみる。そこにはぎつと宝の原石が転がっている。どうやって原石を磨くのか。春蘭の里の思いと歩みに、そのヒントがあるのかもしれない。

足元をしっかりと見つめ直してから、上を向いて歩こう。笑顔あふれる地域のために。(終)